アスモ新聞

アスモ新聞はアスモのホームページ http://www.asumo-kaigo.jp/ からもご覧になれます。
上記のアドレスか【在宅介護センター・アスモ】で検索してください。

「人に喜ばれる仕事を！！」のアスモは、みなさまとの新たな出会いをお待ちしております。

発行所
在宅介護センター・アスモ
創刊第30号

〒165－0026
中野区新井1－26－4 オスカーマンション2F
☎ 03-5318-4007

【反抗期が終わった日】

代表取締役 花堂浩一

ボクは中学1年の時、反抗期の真っ最中だった。母に何か言われるたびに、「うるせぇ、くそババア！」「死ね、くそババア！」と言い返していた。それも毎日のことだった。ある日、いつもと同じように、「死ね、くそババア」と言うと、母は黙ってボクの腕を握りしめて、道路の向かい側の砂浜にボクを無理やり連れて行った。その途中も「放せよ、ババア！」と声を挙げながら・・・。

砂浜で母はボクの目をじっと見つめて言った。「お母さんなんて死んだらいいのね。ここでじっと見てなさい。」すると母はエプロン姿のまま海の中へ歩いていく。腰の辺りまで水につかり、さらに進もうとする。あっという間に首まで水に浸かり、さらに歩き続けようとする。ボクは怖くなって、泣きながら大声で叫んだ。「お母さん、お願いだから戻って来て！」母は振り返り戻ってきた。ボクは涙が止まらなかった。その日からボクは母に「死ね」とか「ババア」とか言わなくなった。反抗期が終わった日だった。・・それから20年ほどの歳月が経ち、母は天国へ、ボクは小学生の息子をもつ父親になった。どれほど子どもがかわいくて仕方ないか、分かるようになった。これから始まるであろう息子の反抗期も、母のことを思い出して、命を懸けて愛していこうと思う。

「お母さん、ありがとう。」

これは、てっぺん大嶋啓介の【夢エール】に送られた体験記で、私のものではありませんが、私も若い頃は同じような感情をもったり、暴言を吐いたりして両親に辛い想いをさせたのだろな～と今になって思うことがよくあります。ただ救われることは、まだ両親も健在で元気にくらしていることです。これから精一杯親孝行ができればと思っています。

私の想い

70歳を過ぎた母を持つ私にとって、近い将来、必ず「介護」が現実のものとなるだろう。頭では分かっていても、うちの親は違う、と思い込む自分に気づきあぜんとする。

介護保険制度が施行されてから、矢継ぎ早に法改正が行われているが、法が変わると現場から不満の声が上がる。例えば呼び名を痴呆症から認知症に変えても、実態は何も変わっていない。毎回同じ事の繰り返しだ。法律が後手後手に回っている。

それは現場を知らない人が机上の議論で法を作っているからなのだろう。

短期間でもいい。法を作る側の人たちに現場がどんな状態が一度体験してほしい。他人事ではない。自分自身がいつ介護される側、介護する側になるか分からないからだ。

老老介護が増加しつつある今、少子高齢社会の今だからこそ、介護する側の人員確保も含めて、現場の実態を正確に把握し、先手を取る法律づくりを進めてほしい。

国は無駄遣いばかりしないで、今この国が豊かであるのは、おじいちゃん、おばあちゃんのおかげだということを痛感してほしいとつくづく考える。

アスモ・グループ会長　南　直也

私の俳句

団子やの　蓬のかおり　旬を愛(め)で

昔のお団子屋さんの前で皆が寄り合い腰おろして春のひと時を感じる喜びをうたいました。

敦煌に　思いを馳せる　春一番

黄砂が日本までとんでくるのは大変だけど、地球がずっと続いている雄大さ。敦煌にいらっしゃる仏様（仏像）のもとから砂が風にのってやってくるのだなあ。

作　久野逸子様

素敵な俳句をありがとうございました。

私のドラマ…

「気づき」と「サワーグレイプ」

ヘルパー　畠山妙子

光の春。一日一日と、暖かさに向かって行きます。介護の道に進んで早くも５年になろうとしております。
３年を過ぎた頃、介護福祉士の試験を受けるべく、勉強を始めました。受験は４０年ぶりです。
毎日、少しずつ勉強をしていた、ある日、今までの仕事を振り返り、頭を強く打たれた様な、衝撃を受けました。
決してヘルパーの仕事をおろそかにしていた訳ではないの。習った知識を基に、技術も向上し、利用者様のお役に立っている。利用者様のニーズに合ったケアをしていると思いあがった私が居ました。
受験勉強をする事により、気づかされた事でした。たとえ、試験に合格しなくてもこの勉強は無駄にはならない。この事を気づかせてくれるために、勉強をしているのだと、解った時、自分が豊かになっていくのが、解りました。お蔭様で介護福祉士試験に合格し、人の気持ちの解る、痛みの解る介護福祉士が誕生しました。（笑い！）（自分で言うのもおこがましいですが）

話は変わります。
有る日の晩。御飯が美味しく炊けて「美味しいなあ」とほおばった時、ふと食介で入っている方を思い出しました。『栄養のバランスを考えて、家族の方が、御飯に鮭フレークを混ぜて供するのです』　私はそのフレークを、混ぜ御飯の様に、御飯全体にしっかり混ぜて食介しておりました。自分が、炊きたての美味しい御飯を食べた時の感動を、ご利用者様も味わいたいはず。早速、食介のケアに入ったときに、混ぜた御飯と白い御飯の半々が良いか、うかがったら『どちらでも良いですよ。でも白い御飯も捨てがたい』と。これも又自分の御飯で気づかされた事でした。

これはイソップ物語の中で、ある日、狐が美味しそうなブドウを見つけます。何度トライしても、ブドウに届かず、とうとう狐は『あのブドウはすっぱくて、美味しくないさ』と、スゴスゴ立ち去ります。暫く行くと黒すぐりを見つけ、『僕が食べたかったのは、これさ』と美味しそうに食べました。

私達は日々、自分の思い通りにはならない事の方が多いものです。
諦めきれない気持ちを「縁がなかった」という言葉を使い、自分に言い聞かせ諦めます。
又、別の事に置き換えます。私の生活信条もそうです。取捨選択して、暮らしています。仕事の依頼を受けるときも、ご縁があるから（私に）来た話と受けています。

ちなみに、サワーグレイプ（英：すっぱいブドウ）は“まけおしみ”の意味です。
縁がなく、別の事に置き換える事は、心理学では、ヘーゲルが弁証法とよんでおります。
（原文）

今回はヘルパーさんに原稿をお願いしました。ありがとうございました。
原稿は常時募集しています。何でもお気軽にお寄せ下さい。お待ちしておりま～す。

シリーズ5

なかのものがたり
～桃園

享保の年、時の八代将軍吉宗は鷹狩りの為、しばしば中野の地を訪れました。

今の中野駅南側の一帯は、郷右衛門という人の土地で、小川が流れ、小高い台地もあり、鷹狩りの休息の場所として大変恰好のところでした。そこで、吉宗は「この地に桃の木を植えたら、さぞよい眺めであろう」と思いたち、享保二十年（１７３５年）眺めのよいところに足場を設け、そのまわりや畑のあぜ道に紅桃５０株と白桃を植えさせました。

さらに松を植え、その周囲６万７千坪（２万２千㎡）の広さに紅桃１５０株を植えたので、春ごとに桃花が咲き乱れ、目を奪うばかりの絶景となりました。

吉宗は、ここを「桃園」と名づけて小さな丘をつくらせ、諸大名の休息の場とした為、村人はここを「大名山」と呼びました。

しかし、安永六年（１７７７年）にこの辺一帯は鶉（うずら）の御猟場になったため、雑木が切られ、次第に桃の木も減ってしまいました。

それでも、明治頃まで若干残っており、昭和の初めに名残りを惜しんで「桃園町」とつけた町名が、４０年代頃まで続いていました。明治維新の頃の関口郷右衛門という人が、昔の地主の子孫ではないかといわれています。